
夜鬼と人の血

獅兎羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜鬼と人の血

【NZコード】

N5184Z

【作者名】

獅鬼羅

【あらすじ】

万事屋銀ちゃんのオーナー坂田 銀時。

そんな、彼の元に一人の青年がやつてくる。

そして、高杉が江戸に・・・。

神威が・・・。

桂が・・・。

辰馬が・・・。

新八と神楽が・・・。

第零訓 自分の血（前書き）

初の投稿でーす。

獅兎羅つ です^ ^

神威、高杉、銀時バカです。

神威と高杉が出すぎるかも・・・。

残酷な描写がある話もあります。

第零訓 自分の血

俺はなんでここに存在してしまったんだね？。

攘夷戦争に出て知った。

俺の真実を・・・。

天人を倒すために参加したのに・・・。

俺の血が楽しんでいる・・・。

殺すこと樂しんでいる。

心から・・・。

楽しんでいやがる・・・。

殺すことを楽しむために参加したんじゃない・・・。

なのに、なのに・・・。

俺の血は一体何なんだ・・・？

そこで知った俺の出生の秘密を・・・。

俺は・・・。

「夜兎」

だつたんだ・・・。

人間と夜兎の・・・

子供だつたんだ・・・。

俺は生まれてきたことが間違いなんだ。

俺の血は

穢れている・・・。

第零訓 自分の血（後書き）

どうでしたか？

いきなりオリキャラ出しちゃいました・・・。

次はどうなるかな・・・。

感想よろしくお願いします^ ^

第一訓 お母さん発音は20歳から（改）（前書き）

2話目書けました。
結構つかれたら。

第一訓　お母さん発言は20歳から（改）

「新八、出勤しました。」

いつものように朝から新八の声が響く。
「こ」は万事屋銀ちゃん。

「神楽ちゃん、起きて。」

新八は押入れを開ける。

「・・・・あと5時間・・・。」

「そんなこと言わずに早く起きて。」

新八はそう告げ、隣のふすまを開ける。

「銀さん、早く起きてください。」

「もう少し寝かせろよ。今日はお天氣お姉さんもないんだから・・・。
。」

新八はため息をつく。

「はあ）。銀さんもいい大人なんだから一人で起きれるようにして
ください。」

「んなもん知るか。つーか新八、お母さん発言は20歳になつてか
らだろ。」

「そうアルヨ。だからお前は新一じゃなくて新ハネ。なんだよばち
つて。」

そんな」と書つのはこいつの間にか起きてきてる神楽だ。

「そんなもんは原作者に言え！僕に言われてもわかんないよ。」

「なに？ワンパークの人についての？」

と銀さん。

「ちげーよ。銀魂のだよ。銀魂の。ワンパークの人と言つたら全然
わかんないでしょ！」

「んなもん分かんないよ。もしかしたら知つてんじゃねーか。」

「そんなわけあるか！！」

「つーか騒いだせいで目が覚めちまつたよ。どうすんだ。」

ダルそうな眼をした銀時が言つた。

「どうすんだじやないわー！」

新八のつっこみ。

「わーつたよ。起きりやいんだろ。」

あれこれあつたが新八は銀時と神楽を起こすことに成功した。

「つー、これなんのミッション？作者さん。」

第一訓 お母さん発言は20歳から（改）（後書き）

どうでしたか？

新ハつてこんなん？って思いながら書きました。
結構似てない・・・かも。

第一訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる（前書き）

第一訓、読んでみて・・・。
メツサ読みにくい・・・。
すいませんでした。

第二訓からは少しが改善されました。

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる

「暇だ〜。依頼ねえーのか?」

銀時がぼやく。

「ぼやかないでください。大体いつも全然来ないじゃないですか。」

新八の正論。

万事屋"なんでも屋がこの万事屋銀ちゃん。

そのため、怪しがるのか・・・依頼はほとんどこない。

「仕方ないネ。私と銀ちゃん以外の従業員がダメガネだからナ。」

毒舌発言の神楽。

「依頼来ても大体僕しか働いてないよ、神楽ちゃん。」

「それが雑用の仕事アル。」

またも、毒舌発言の神楽。

「さつさと矛盾してゐる。」

と新八。

プルルルル、プルルルル。

「あつ電話アル。」

「お、依頼か?」

銀時は電話に出る。

「はい。万事屋銀ちゃんです。」

『外に出なよ。』

「はあ？」

『いいから外に来て。』

その声は男らしいが子供っぽく、声が高かつた。

「オメーはいつてえ誰だ？」

『・・・。』

ブツ。

電話が切れた。

(なんだ今の・・・。)

「銀さん、誰からですか？」

「わからんねえ・・・。」

新ハと神楽が顔を見合わせた。

(さつきの声どつかで・・・。)

銀時は玄関の方へ歩いて行つた。
その後ろに新ハと神楽も続く。

ガラララララ。

銀時たちが外に出ると屋根の上から人が降りてきた。
その人は傘をさし、赤と黒の着ものを着ていた。
神楽が驚いた顔をしている。

「銀さん、あの傘。」

銀時も驚いた顔を見せていく。

前に居る人は夜鬼の傘をさしていた。

その人は傘を上げる。

その顔は髪の色がオレンジで、眼の色が青かつた。
これは完璧に夜鬼の特徴とかぶつている。

「久しぶりだね。銀時。」

そう言つた青年の顔を見ながら銀時はまだ驚いた顔をしている。

「忘れちゃつた。じゃあこれ見たら思い出すかな?」

そう言つと青年は懐から兜割を取り出した。
それを見た銀時は何か思い出したようだった。

「おめーは・・・。」

第一訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる（後書き）

どうでしたか？

これからどうなる事か・・・
自分でも心配です。

感想、よろしくお願ひします。

第三訓 監察はすぐ（前書き）

第三訓までいきました。

今回は真選組中心でいきました。

沖田のキャラを作るのが大変でした。

第三訓 監察はすぐー

「高杉が江戸に！？」

真選組の屯所に近藤の声が響いた。

「はい。俺らが仕入れた新たな情報です。」

「ほお。あの野郎、今度は何を企んでやがる。」

土方が呟いた。

「なんでも、攘夷戦争に参加していた人を探しているとか・・・。
「攘夷戦争か・・・。旦那も参加してやしたよねイ。」

沖田が言った。

銀時は真選組と見廻組との争いの時に自分が白夜叉だとばらしている。

土方が口を開いた。

「ああ。それも、桂や高杉に並ぶほど強かつたという白夜叉だったらしいしな。」

そして、呟いた。

「後の有名じじいのは坂本 辰馬と戦場の獅子かあ。」

「坂本 辰馬は快援隊の隊長。でも、戦場の獅子って一体誰なんですかね？」

「ああ。まつ獅子なんて言つかうけつじつ強いだろーな。」

土方は言った。

「やう言えばその高杉。一人のガキを連れ歩いているらしい……。

「ガキ……。」

近藤は呟いた。

「はい。なんでも夜兎の特徴とかぶつてるらしいです。」

山崎は言った。

「夜兎な……。万事屋のとこのチャイナも確か夜兎だよな。そこにいくのが手つ取り早いな……。」

「なつ、万事屋に行くのかよ？」

土方が嫌そうな声をあげた。

「俺もいやですよ。大体あのチャイナとなんか会いたくないですぜ
イ。」

沖田も嫌そうな声を出した。

「仕方ない。夜兎のことや、高杉のことを知つてんのは万事屋の奴
らしかいないんだ。」

近藤がそう言つと、沖田も土方も承知したらしい。
ゴリラでも人望は厚い……。

「俺、「ココリじゃなーし。作者さん！」」

第三訓 監察はすゞー（後書き）

どうでしたか？

真選組のキャラは・・・

つくりづらい！

でも、自分的にも真選組は好きだからこれからも色々出してこきます。

第四訓　お金は必要なもの（前書き）

第四訓だよ。

銀さんと神楽と新ハと・・・

あの青年が中心。

第四訓 お金は必要なもの

「銀さんの知り合いなんですか？」

万事屋に新八の声が響いた。

「まあーな。」

青年は髪をボーネテールにしていて、ぱつと見、青年時代の土方ぐらいい。だが、神楽だけは警戒を解けきってないらしく、じつと青年のほうを見ている。

「俺、伊達 柚兎。歳は25。」

柚兎は笑いながら言った。

「なんで、夜兎の特徴を持つてるアルカ？」

神楽は警戒した目を浮かべながら言った。

「俺が夜兎だからだよ。完ぺきな夜兎じゃないけどね。」

「どういう意味アルカ？」

神楽は不思議そうな眼をしながら柚兎に聞いた。

「俺さあ、夜兎と人のハーフなんだよね。半分が人の血でもう半分が夜兎の血。」

「ハーフ！？」

新ハと神楽が声をあげた。

「そう。まあ髪の色と眼の色、そして日に弱いところは夜鬼譲り、人譲りつてなにかわかんないけど、たぶんなんかあるんだろうな。」

銀時が口を開いた。

「つーか、なんでいんのよ？」

「いやダメ？」

「別にいいけどよ。」

「あの・・・ひとつ聞いていいですか？」

新ハが言った。

「いいよ。なんでも聞いて。」

「じゃあ、柚兎さんはいつ銀さんに会ったんですか？」

柚兎は少し顔を曇らせたが、すぐ笑顔になり言った。

「攘夷戦争って知ってる？銀時とはそこで会ったんだ。」

「知っています。20年前に起きた天人との戦の事ですよね。」

新ハが言った。

「そう。まあ俺らが戦ったのは終わっちゃんだけどな。ジラや晋助や辰馬ともそこへ会ったんだよ。」

「そう言つて柚兎はどうかうれしそうだ。」

「つーか柚、オメーリーに泊るさ?」

銀時が言った。

「まあね。つーことで、居候させて。」

「なに勝手に決めてんだ。」

「別にいいじゃん。居候ぐりこわあ。」

(柚兎さんつて以外と・・・血口の中。)

「つーことで、よろしく。」

「だから、勝手に決めんな!」

そこで新八が口を開いた。

「まあ、いいじゃないですか。僕、志村 新八です。」

「私は神楽ネ。夜兎アルヨ。」

「じゃあ、よろしく。神楽に新八。」

銀時が困った顔をしている。

「俺んとこ、もう金がないんだけど・・・。」

「気にしない、気にしない。」

そんなことで夜兎と人のハーフの柚兎を居候させることになった万事屋銀ちゃん。

家計のほうは大丈夫なのだらうか・・・。

「大丈夫じゃないわ～！」

第四訓 お金は必要なもの（後書き）

どうでしたか？

昨日の夜42巻読みました。

沖田と土方がカツコよつかった。

近藤はやっぱ「コラだね・・・。

感想よろしく。

第五訓 いつまでもたつても変わらない（前書き）

第五訓 いきました。

お気に入り登録してくださった方々ありがとうございます。

今回は万事屋と柚兎中心です。

第五訓 いつまでもたつても変わらない

「おはよーい」やることます。」

次の日。

新八が出勤してきた。

「おはよー。」

「柚兎さんは起きるの早いですね。」

昨日から万事屋に居候している柚兎は朝から椅子の上に座っている。

「銀さんと神楽ちゃんはまだ寝てますか?」

「寝てるよ。銀時は相変わらず朝寝坊だなあ。」

柚兎はどこか懐かしい感じで言った。

「昔から朝寝坊だったんですか?」

新八が聞いた。

「そう。戦時中もさ、戦争に遅れてくるは、会議に遅れるはで悩みの種だつたんだよ。」

柚兎は呆れ顔で言った。

「おはよーアル。」

神楽が起きてきた。

「おはよ。神楽ちゃん。」

「神楽、おはよ。よく眠れた?」

「ふあー。寝れたアル。」

神楽はあぐびをしながら言った。

「寝むそだね。」

「大丈夫アル。こんなのお茶の子をこそいネ。」

柚兎はそう言つて神楽を見ながらにじりと笑つた。

「おはお。」

銀時が目を擦りながら起きてきた。

「銀ちやん、起きるの遅いアル。」

そう言つて神楽。

「神楽が言えることじやないでしょ。」

笑いながら言つて柚兎。

そして、銀時に向かつて言つた。

「そして、銀時もさつさと起きる。もう大人だろ?」
「へいへい。」

そう言う銀時。

そのあと3人（新八を抜く）は朝ごはんを食べて、ボーッとしている

た。

「暇だ～。」

「そうアルナ。」

ソフナーの上で、ゴロゴロする銀時と神楽。

その時だった。

インターホンが鳴った。

「おっ、依頼か？」

銀時は玄関の扉を開けた。
そこに居たのは・・・。

「久しぶりですねイ、旦那。」

「税金泥棒。何しに来たんだよ。」

真選組の近藤、土方、沖田、山崎の4人だ。

「誰が税金泥棒だ。」

イライラしながら言う土方。

「で、何の用だ？」

「俺らが用あんのはオメージャねえ。あすこに転がってるチャイナ娘に用があんだけよ。」

「神楽に？」

不思議そうな顔をする銀時。

「ああ。夜鬼についてだ。」

転がつていた神楽とボーッとしていた柚鬼が反応した。

「高杉のところに居る三つ編みのガキについてな・・・。」

(神威一)

第五訓 いつまでたっても変わらない（後書き）

どうでしたか？

真選組も出しました。

と、ここで・・・。

出てくる人の年齢など紹介します。

坂田	銀時	・	・	26歳
志村	新八	・	・	16歳
伊達	神楽	・	・	13歳
近藤	柚兎	・	・	25歳
土方	黙	・	・	29歳
沖田	十四郎	・	・	26歳
山崎	退	・	・	25歳
桂	総悟	・	・	18歳
高杉	小太郎	・	・	26歳
坂本	辰馬	・	・	25歳
阿伏兎	晋助	・	・	26歳
神威	・	・	・	25歳
・	・	・	・	26歳
・	・	・	・	25歳
3歳	19歳	・	・	26歳
2歳	・	・	・	26歳

と、いう感じです。

感想よろしくお願ひします。

第六訓 ひつくり発言は驚くものだ。（前書き）

第六訓です。

今回は真選組と万事屋、柚兎中心です。

第六訓 ひつくり発言は驚くものだ。

「ほおー。あの高杉のとこにねえ。」

真選組を中に入れたあと銀時が呟いた。

「そうだ。チャイナ娘、なんか知つてないか？」

そう言う土方の眼はいつもながら鋭い。

神楽は下を向いている。

その様子を黙つて見る新ハと銀時。

それに、柚兎。

「知つてるアル。あの片田野郎のとこに居るのは・・・私の兄貴アル・・・。」

「兄貴！？」

真選組が声を上げた。

なんとなく予想は付いていた銀時と新ハはやっぱりなという顔をしている。

柚兎は少し驚いてる顔をしているが、笑顔は崩していない。

「オメー、兄貴が居たのか・・・。」

驚いた顔をする真選組に対し、下を向く神楽。

「神威とかいう奴だつけ・・・？」

そう言つのは柚兎。

その発言を聞き、新八、銀時が驚いた顔になった。
神楽も顔を上げた。

「柚^{イチ}。 オメーなんで名前を知ってる?」

銀時は驚きまくっている。

「ここに来る二田前、晋助に会った。つーか呼び出された。
「はあー!?」

真選組と万事屋メンバーが声を上げた。

「てか、オメー誰ですかイ?」

沖田が聞く。

「俺は伊達 柚^{イチ}、25歳。」

「おい。高杉となんかあんのか?」

土方のその眼はさつきよつ鋭さを増していく。

「俺はただ、晋助やジラや銀時や辰馬の知り合いつて事だけだよ。」

そのメンツを聞き、真選組は頭をフル回転させる。

「まさか・・・お前が・・・あの戦場の獅子か?」

その近藤の問いに対し、あっさり答えた。

「そうだけど。」

真選組が顔を見合わせる。

「晋助が呼び出したせいに、その神威つてヤローに会つただけ。以外に子供っぽいね。」

「お前が言えることじやねえだら。」

銀時は柚兎に対し、冷静にツツコム。

「神威となんか話したアルカ？」

「うーん。あつ、俺が夜鬼と人のハーフってことと、晋助らの知り合いつてことぐらい。」

その話を聞き、さりに真選組が顔を見合わせる。

「ま、この辺はさらっと受け流せ。」

銀時は真選組の空氣を察し一言告げた。

「あとひとつ言つておく。あんま晋助を追い回すな。無駄死にするぞ。」

柚兎はあっせりそう告げた。
土方は柚兎の胸元をつかむ。

「お前、知り合いだからとか言つ理由で庇つてんのか？」「庇つてないよ。ただ俺はあいつが死ぬのを見たくない。」

それを聞き、さらにめが鋭くなる。

「もうひとつ言うと、誰も死んでほしくない。今のはいつの眼は復讐に走る哀れな獣の眼だ。今のあいつに立ち向かって勝てる奴なんか俺の知ってる限りで4人しかいねえ。」

その言葉を聞き、土方は柚兎の胸元を放す。

「その4人つてのは誰だ？」

「まずは俺。そして、銀時にジラニ辰馬だよ。」

土方はどう反応していいか分からなかつた。

「ま、決闘になつても誰ひとり晋助を殺すことはないね。」

そう言い銀時の方を振り向く。

銀時は目線をそらす。

「ま、いいや。」

近藤が一言言い空気が少し和んだ。

第六訓 ひらく発言は驚くものだ。（後書き）

どうでしたか？

次あたりで・・・ジラと辰馬を出そうかな？

高杉はまだあとになりそつ・・・。

感想もよろしくお願ひします。

第七訓 人の家で争うな！（前書き）

第七訓です。

辰馬、桂、陸奥の初登場。

第七訓 人の家で争うな！

「で、その神威つて奴はどういう奴ですかイ？」

万事屋内では真選組が居座つている。

「バカ兄貴は・・・強い奴を殺す」としか考えてない奴ネ。親だろうが妹だろうが手に掛ける奴アル。」

そう言つ神楽は少し寂しそうだ。

「仕方ないんじゃねえーの。それが夜兎の本能。強き者の血を求め、血のために生きる一族なんだよ。それが、夜兎なんだよ。」

柚兎はあつせりそう告げた。

「ゆずつちは・・・夜兎の本能が目覚めたことつてあるアルカ？」

神楽は怯えたような眼を見せている。

「あるよ。」

柚兎は笑顔を崩さず言った。

「攘夷戦争の時になんども。」

周りの人は黙つてしまつた。
その時だつた。

ガララララ。

「銀時！..」

長髪が目立つ男が入ってきた。

そう桂 小太郎だ。

「桂あああ！」

沖田が叫んだ。

「おい、銀時。なんで真選組が居る？」

「桂ああああ！」

「いい加減にしろ。人んちで何やつてんだ？」

銀時が声をあげた。

「よお、ヅラ。久しぶり。」

桂が顔を上げた。

「あつ、柚兎！？貴様なんで居る？」

「居候してゐる。」

柚兎は笑顔で言った。

「つーかヅラ。お前何の用？」

銀時はヅラに聞いた。

「高杉のこと『ドガア————ン』……ってなんだ？」

いきなり大きな音が屋根からした。

銀時らが上を向くとそこには見慣れた船が突っ込んでいた。真選組が驚いた顔を上に向いている。

「アハハハハハ。すまんの一金時。屋根壊してしもーた。」

銀時は眉間にしわを寄せた。

そこに居たのは無論いつものトラブルマイカー坂本 辰馬だ。

「辰馬！お前は何度、人の家を壊したら氣がすむ。しかも金時じやない銀時だ。」

「坂本！」「辰馬！」

桂と柚兎が同時に叫んだ。

「お、ヅラに柚兎がが？久しづりじゃの～。」

真選組はいきなりやつてきたモジヤモジヤ天パに驚いた顔を見せている。

「おい、万事屋。コイツ誰だ？」

土方が聞いた。

「ああ。坂本 辰馬。快援隊の隊長だよ。」「え？！」「コイツが坂本 辰馬？」

真選組がさらに驚きの顔を見せた。

その時、辰馬の横から拳がとんでもなく、辰馬の顔面に当たった。

「ぐはっ。」

全員がその方向を向く。

「おまんらすまんの〜。頭が迷惑かけてスマンきこ。」

一人の女がそう言った。

陸奥だ。

「すいませーん。」

玄関から女の声が聞こえた。

その声を聞き近藤が思いつき反応した。

第七訓 人の家で争うな！（後書き）

どうでしたか？

辰馬はまた家を破壊しました。
ヅラはヅラだね。

感想よろしくお願ひします。

第八訓 笑顔にも種類がある（前書き）

第八訓です。

今回お妙さんがやつてきて・・・
大変なことに・・・。

第八訓 笑顔にも種類がある

「お妙さん……」

近藤が来訪した女に飛びつく。
それがあつたりとぶん殴る。

「ぐああああああーー！」

そして近藤が吹っ飛ぶ。

「近藤さん、いい加減にしてください。あの世に逝かせますよ。」

お妙が笑顔を崩さず言った。

「そう、銀さん。依頼持ってきたわよ。」

銀時たちが眼を光らせている。

「一日キャバ嬢の仕事手伝つて。ここ居る人にも手伝つてもらおうかしら。」

全員の眼から光が消えた。

逆らつても無駄とうことは十分承知している。

「じゃあ、銀さんと新ちゃん、神楽ちゃん、沖田さん、山崎さん、ウザイ長髪の人、オレンジの長髪の人、笠をかぶった女の人はキャバ嬢。」

「姉上。あのなんでキャバ嬢なんかに？」

新八が恐る恐る聞いた。

「すまいるわね、年末年始も営業するのよ。でもね、キャバ嬢が旅行とかで減つてしまつて……それで思いついたの。銀さんたちにお願いすればいいんだって。」

お妙は一二三四五言つた。

「あの、男も紛れているんですけど……。」

「いいじゃない。数が足りれば。」

(よくそんな)と言えるな……)

「仕方ないひと肌脱いでやう。」

桂が言つた。

「あの……わしもキャバ嬢になるがか?」

男勝りの陸奥が言つた。

「そうよ。いいじゃないキャバ嬢ぐらい。」

反抗できない微笑を顔につけてお妙は言つた。

「あとは……近藤さんとモジヤモジヤは雑用係。土方さんはスッタフで。」

(この笑顔には反抗できないんだよな……)

「うん」とどこか呆あよ。」

そしてやつてきたスナックすまい。

「おじょひやーん。」

辰馬がおじょうのもとこ走り出す。

それをお妙が引っ張る。

「坂本さん。あなたの仕事はあつむよ。」

その笑顔にやすがのKYOUの辰馬も顔を引いた。

「ああ。銀さんたちも着替えてきて。」

お妙に引っ張られ銀時たちも着替えていく。

出てきた銀時たちを見てお妙がびっくりする。

「なかなか似合つてゐるわね。」

沖田と柚兎と山崎と陸奥はなかなか似合つている。

神楽は前よりマシになつていて。

銀時とジラと新八は似合つも女ぼくない。

「柚兎オメー・・・。女じやねえーか・・・。」

「銀時・・・お前はなんかヤダ。」

柚兎は笑顔で言った。

「ヤダとはなんだ?」

「簡単に言つとヤダ。」

また笑顔で言った。

「簡単に言つてねえよ。」

「柚兎、俺はどうだ?」

ジラが聞く。

「つーんキモイ。」

またもや笑顔で言つ。

「柚兎・・・キモイとはなんだ?」

「だーかーら。キモイ。」

ジラは少しショックだつたらしく壁の方へこんでいる。

「ま、キモイの当たり前ですぜイ。」

沖田はジラの姿を見て言つた。

山崎も引いている。

「ジーがキモイのだ。」

「全部じやき。」

陸奥が表情を変えずに言つた。

「ま、べつにいいアルヨ。キモイのは元からアル。」

「リーダー、それはないだろ。」

「いいアル。失うものなんてないでしょ。」

毒舌の神楽。

「あるよ。俺の何か失うよ。」

「口げんかしないで準備してね？殺すよ。」

お妙が言つ。

「銀時なんか聞こえるだ。お妙さんの口からとてつもない言葉が聞こえるぞ・・・。」

柚兎が始めて引きつった笑顔を見せた。

「聞き流せ・・・。つひこんだら殺されるだ・・・。」

銀時も顔を引きつらせている。

「じゃあ。はやく準備してね。」

「はーい・・・。」

第八訓 笑顔にも種類がある（後書き）

どうでしたか？

銀時たちのキャラ嬢姿はといふと。

銀時・・・いつものパー子

ヅラ・・・いつものヅラ子

神楽・・・吉原の時みたいに一つのお団子

新八・・・いつものパチ恵

柚兎・・・髪をほどいた感じ

沖田・・・前髪をあげて、髪を二つにしている

山崎・・・髪を二つ

陸奥・・・髪をポニー テール

沖田つて縛れるほど髪あるのかな？

感想よろしくお願ひします。

第九訓 兄弟つて似るもんだ（前書き）

第九訓です。

オリキヤラ二一人目だすよー！

第九訓 兄弟つて似るもんだ

「やつと終わつた……」

店が開いてから約5時間。

銀時たちはキヤバ嬢の仕事を手伝いなんとか終わった。

「密にもキモイ言われた……。」

ヅラは壁にくつづいてへこたれでいる。

「情けねえーな、ヅラ。」

銀時が言つた。

「旦那も人のこと言えないじゃねえーですかイ。」「んなことねえーよ。」

銀時が反論した。

「アハハハハ。嘘はよくないき。」

「辰馬、黙れ。」

「お前らはいつまでたつても……変わんないね。」

柚兎が笑顔で言つた。

その後、ヅラと別れた万事屋一行と辰馬と陸奥に真選組は万事屋へと足を進めた。

「で、なんでオメーらもついてくんの?」

「一応警察なんだな。」

近藤はそう言い豪快に笑った。

「はい。そーですか。」

万事屋の方へ近づくと一人の青年が立っていることに気づく。
青年はこっちの方を見た。

暗く顔まではよく見えなかつたが、真選組は驚いた。
どこか高杉に似ているところがあつたからだ。

「よお、銀時、辰馬、柚兎。」

真選組は刀に手をかけたが、銀時たちが驚かないところを見て刀から手を放した。

「なんでいつも久しぶりの人気がやつて来んのかな?てか、なんでここが分かつた?」

銀時は青年に対して、警戒せずに聞いた。

「坂田 銀時つて人知つてゐ?つて聞いて、ここを教えてもらつた。」

青年もあつさり答える。

「おい、万事屋。知り合いか?」

土方が聞く。

「ああ。攘夷戦争よりも前からの友人だよ。」

銀時が答えた。

「じゃあコイツも攘夷戦争に・・・。」

「まあな。ま、いつたん入るか。ここじゃさみーしょ。」

そう言い銀時は青年を手招きして中へはいって行つた。
その後ろに真選組や辰馬たちが続く。

中に入つて明るいところで見た青年は高杉にそっくりだった。
髪の色は紫で三日月の模様が描かれている赤い着物を着ていて、赤
い眼をしている。

「血口紹介ぐらいしろよ。」

銀時が青年に言つた。

「へえーい。俺、高杉 晋次。高杉 晋助の弟で23歳。」

「おとうとおおーー!？」

真選組が声をあげた。

新八も神楽も驚いている。

「そう、眼の色以外と性格以外はそっくりだよ。」

銀時が言つた。

そして晋次に向かつて言つた。

「で、何の用?」

晋次は一瞬顔を曇らせたが、眞面目な顔になつて言った。

「兄貴をどうにかしてくれ……。」

銀時と辰馬は顔を見合せた。

「ジラにも会いたかつたんだけど、ジニーに困るか分かんねえーし……だから銀時……。
兄貴を……なんとかしてくれよ……。」

銀時はため息をついて言った。

「はあ～。アイツのことをなんとかしてつて言われてもよ……。今
の高杉を引きずり出すのは……無理に近いと思うぜ……。
「それは……そうだけど……。でも、兄貴が復讐しようとした
つて……先生はそんな
事望んでねえんだ……！」

晋次は真剣な声で言った。

「ま、俺も少しばかり力になつてやるよ。お前に任せたつてお前弱いだ
ろ?すぐ死んじまつしよ。」

真選組は呆然としていた。

辰馬はニコニコ笑っているし、柚鬼もにやつて笑っている。
神楽と新ハは啞然としている。

「じゃ、ジラにも頼んで、高杉の居場所でも探してもうつわ。
「よろしく頼むな、銀時。」

第九訓 兄弟つて似るもんだ（後書き）

どうでしたか？

ここでオリキヤラ紹介ぱーと1

伊達 柚兎・・・25歳の175?。6月20日生まれ。

戦場の獅子と呼ばれた攘夷戦争の時に銀時らに並

ぶく

らい有名な攘夷志士。

夜兎と人のハーフ。

髪の色はオレンジで眼の色は青。

第十訓 確信せひせひこと理由がある（前書き）

第十訓です。

またオリキャラ出ます。

そして・・・高杉初登場です。

第十訓 確信なしあげたと理由がある

「晋助イ〜。」

江戸のどこにある船では一人の少年が声を上げた。
真つ黒な髪に、真つ黒な目の少年だ。

「おう。ちやんと斬つてきたか？」

冷たい声が響いた。

「うん。ちやんと斬つたよ。」

子供っぽい声だがその頬には返り血が付いている。

「はあ〜。元志は色々恐いっスよね。」

女性の声も響いた。

「そお？」

元志と呼ばれた少年は藤原 元志。
歳は14歳。

「いつか俺も元志と戦いたいなあ〜。
『団長、やめときな。』

また子供っぽい声が響いた。

「ククク・・・」これからどうなんのか楽しみだ。」

冷たい声の主は冷たい笑顔を顔に張り付け言つた。
元志は笑顔だ。

次の日の夜・・・。

真選組の屯所では土方、近藤、沖田が話している。

「また辻斬りかよ・・・。」

「高杉の仕業ですかねイ？」

昨日の夜、巷で辻斬りが発生。

そのことについて話しているようだ。

「どうだかな。だが可能性としては高いぞ。トシ、警戒を強める。」

「おう、近藤さん。」

ドンドン。

真選組に来訪者。

「誰だ?」

近藤たちがドアを開けるとそこには居たのは・・・。

「万事屋・・・。」

「よお、昨日ぶりだな。」

銀時が言った。

「オメー ら何の用だ?」

「いやー 晋次が用があるってよ・・・。」

すると、銀時の後ろから晋次が姿を現した。

「あの、昨日の・・・辻斬りの件で・・・。」

真選組が顔を見合わせた。

その後、銀時たちを中心に引き入れた。

「で、辻斬りがどうした?」

晋次は確信をもつたように言った。

「たぶん、あの辻斬りは・・・兄貴の鬼兵隊の仕業です。」

真選組は驚いた顔見せていく。

「おい。なんで確信できる。」

土方が鋭い声で聞いた。

「それは、俺が説明します。」

柚兎が言った。

「昨日の夜・・・すごい殺氣がしたんです。その殺気が・・・高杉の殺気にそっくりだつたんです。」

「おー、なんでお前殺氣が分かるんだ？」

柚兎は笑顔で言った。

「夜兔は殺氣に反応できるんですね。」

その時だった。

柚兎が顔を曇らせた。

「どうした？」

「UJの殺氣だ・・・。UJたちに来てる。」

全員が驚いた顔をしている。

ドン！－！

真選組の扉が開いた。

「さあーて。ひと暴れしますか。」

第十訓 確信なしあげたと理由がある（後書き）

どうでしたか？

オリキヤラ紹介。ぱーと2

高杉 晋次・・・23歳の身長165cm。10月8日。

攘夷戦争では鬼兵隊の副官だった。

高杉の実の弟。

性格は高杉の反対で口数が多く、おおらかで、明るい。

そして、少しSまじり。

見た目は高杉に似ている。

眼の色は赤、髪の色は紫。

服は三口用模様の入った赤の着もの。

感想よろしくお願ひします。

第十一訓 場の空氣に合せり（前書き）

第十一訓です。

過激化したよ。

苦手な方は見ない方がいいかも・・・。

でも・・・題名が「つらくなことねえーよ。

あこつら来るよ。

“やつすんだよ。

第十一訓 場の空氣に合わせる

「さあーて、ひと暴れしますかあ。」

一人の少年が入ってきた。

真選組の見張りが少年の方へ突っ込む。

「もう邪魔だよお。」

そう言い刀に手を当てる。

そして一瞬で真選組の見張りの人から血が飛んだ。

ドタッ。

「なんだあー。その程度あ。」

そう言つと少年は奥の方へ歩いて行つた。

そこに、不運の山崎が通つた。

「さあーて。やつちやおう。」

そう言つとなんの躊躇いもなく刀を抜いた。

山崎は震えて入るが、やっぱり真選組。ちゃんと刀は抜いている。

「あれれ、反抗しちゃうの。お。」

少年は刀を振り下ろした。

ガキイイイ。

振り下ろした刀は刀によつて止められていた。
いつの間にか山崎の持つていた刀が止めた人の手に握られている。

「晋次・・・くん・・・。」

山崎が震える声で言った。

奥から近藤たちや銀時たちもやつてきた。
そこに居る少年の近くに居る倒れている真選組を見て顔が驚いてい
る。

「へえ～。君が晋助の弟？」

柚兎や銀時が驚いた顔をしている。

「お前、なんで兄貴を知つている。」

晋次が言った。

「だつて俺。晋助が率いる鬼兵隊の隊員だよお。」

それを聞き、真選組も驚いた顔をしている。

元志は「口」口ひして言った。

「俺、藤原 元志。」

「あー、殺しちゃおつかな？」

元志は刀に力を込めた。

「ぐつ。」

晋次もありつたけの力で抑えていた。
すると、いきなり元志が力を弱めた。

「うわっ！！」

「隙ありイーー！」

元志は刀を振り下ろした。

「なんてな。」

晋次はすぐ体制を立て直した。
そして、刀をかわした。

「ありやーなかなかやるねえ。」

タツ。

「で、元志だつけ？」

「うん。そうだよお。」

子供声で言つた。

「お前、兄貴に何頼まれた？」

晋次の眼は怒りが混じつているようだ。

「教えないなあ。」

挑発するような言い方。

その様子を見る銀時、新八、神楽、柚兎、近藤、土方、沖田。
それに、震えてる山崎。

「局長・・・奥・・・行つた・・・方が良くないですか？俺付いて
いきますから・・・」

「ついでに土方さんもあの世に行つた方がいいんじゃないですかイ
？」

「オメーは黙つてろ。」

その様子に眉をぴくぴく震わせながら呆れ顔をする晋次。

「あの～。こいつ緊張状態なんですがけど・・・。完ぺきに場を壊さ
ないで下さ～よ。」

あきれた様子で言つ晋次。

「テメー、一人だけで緊張してろよ。」

だるそうに言つ銀時。

「銀時、後で殺す！！」

晋次が怒る。

「あの～俺のこと忘れてない？」

さつきからほつたらかしの柚兎がやっと口を開いた。

「お前・・・山崎より、影が薄くなつてねえ。」

「今回、活躍してゐよ俺。」

山崎が屁理屈を言つ。

「まあ～いつもよりな・・・。」

「つーか・・・俺のことほとつかないでよ。」

イライラしている元志。

そんな場になぜか一人の男が乱入。

「アハハハハ。」

そんな声に即効つっこむ新八。

「坂本さんなんでいるんですか？一番場の雰囲気壊してますよ。」

「そうがか？」

自覚していない辰馬。

「ダメだーこの人。いつまでたつてもバカなまんまだ。」

「しかたなかろう。それがコイツだ。」

それにつっこむ晋次。

「ヅラー。お前なんで居んの？」

「ヅラじゃない、桂だ。」

「かーつーひー！ー！」

沖田の手にはバズーカが。
そこへ、刀を振り上げる元志。

ドガーン。

2つの音が重なり合う。

「うわーと。」

桂と晋次が同時に声を上げる。
真選組VS桂の戦いが勃発！！
その奥では、晋次VS元志！！

「死ね～！！桂。」

「桂じゃない、ヅラだ。あつ、間違えた・・・。」
「どんな間違えですか？桂さん。」

晋次たちはどうしようと・・・。

「うらあ――――！」

「チツ、あたあ――――！」

血だらけになりながら戦う一人。
シリアルスとボケが綺麗に絡み合っている。

その様子を暇そうに見る万事屋。

だが、それは・・・一瞬で壊れる。

ドオン。ドオン。

「なんだあ？」

音がした方を見ると黄色頭の女（高杉バカ）とロリコン男（自称フエミニースト）それに、音楽バカ（人斬りね、この人）の3人が。

「なつ、鬼兵隊！？」

驚きの声を上げる近藤。
そして・・・。

ドオーン。

神楽はそれをかわす。

「あれれ。前より強くなつてるね、神楽。
「バカ兄貴イイイイー！」」

神威は二口二口している。

「おいガキ。なんでお前まで居る？」

銀時はだるそうに言つた。

「お兄さん、ちゃんと生きてた。エライ、エライ。
「ガキに言われたくねえーよ。」

すると・・・。

「ガキじゃない、桂だ。」

桂が乗ってきた。

「オメージャねえよ。つーか何乗つてんだ?」

銀時はやつぱりダルそうだ。

「アハハハハハハハ。」

「辰馬、黙つてろ。」

柚兎がつっこむ。

そして、奥の晋次と元志は・・・。

「ハア、ハア、ハア。いい加減にしてくんない?」

血だらけになつた晋次が言つ。

「君こそ・・・いい加減にしろよお。ハア、ハア、ハア。」

同じくらい血だらけの元志。
つまり五分五分ということだらう。

「おーい、晋次。大丈夫か?」

柚兎が言つた。

「つるさい。ちょい黙つてて。」

そつ言つと晋次は元志の方へ走つていく。

「トラアアアアアアー!!」

ガキイイイイイイイイ。

「だーかーひー。ーひ。ちひをひきまへ。

- ၁၁၁ -

そこへ。

一人の声が響く

「おい。元志、お前にしちゃ珍しいじゃねえーか。」

冷たい声

「兄貴」

第十一訓 場の空氣に合わせり（後書き）

どうでしたか？

ここで・・・。

オリキャラ紹介ぱーと3

藤原 元志・・・14歳の170cm。7月6日生まれ。

高杉の右腕。

愛称は「人斬りげん」

子供なくせにすごく強い。

ただ、高杉よりは弱いらしい。

黒髪に黒目。

感想もよろしくお願ひします。

第十一訓 怪我をしたり無理をやるな（前書き）

第十一訓です。

ちよいとグロイかも・・・。

第十一訓 怪我をしたら無理をやるな

「兄貴・・・・・。」

晋次は呟いた。

全員が声をした方向に目を向ける。

「高杉イイイイイイイイー！」

銀時と桂が同時に声を上げる。

「ククク・・・。久しづりだな、銀時にヅラ。」

「ヅラじゃない、桂だ。」

真選組は呆然としている。

「晋助イ。君の弟、強いよお。」

元志が血をポタポタ垂らしながら言つた。

「ククク・・・。テメエにしちゃ珍しいじゃねえーか。」

その様子を見る、晋次。

「オメーら、いつたん退くぞ。」

高杉がやつぱると、また子たちも後に続いた。

「おー！高杉イー！」

銀時が怒りが混じった声で言った。

高杉は振り返ると、一言告げた。

「止めたいなら、近いうちにターミナルへ来い。」

そう言い、屯所から去つて行つた。

その様子を立つのもやつとな晋次が見ている。
その様子に気づいた銀時たちが駆け寄る。

「おい、晋次。大丈夫か？」

「ハア、ハア、ハア。平気、平気……。」

笑顔で言つているが、いつ倒れてもおかしくない状態だ。

「大丈夫に見えねえーよ。」

それでも無理に笑顔でいる晋次を辰馬が背負つ。

「ちょい、辰馬。痛つ。」

「無理するじゃなか。」

そこへ、陸奥がやつてきた。

「坂本。つてなにがあつたがか？」

「まあ、色々とな。」

銀時が言つ。

そのまま一行は屯所の中に入つていく。

そして、桂は仕方なく中へ入れる。

「痛い！痛いって、ヅラ。」

「我慢しろ。そして、ヅラじゃない、桂だ。」

包帯やらをまかれている晋次。

「で、お前らはどうすんだ？」

土方の声で周りが静かになる。

「俺は、兄貴を止める。絶対止めてやる！！」

先に静寂を破ったのは晋次だ。

「なんで、お前は・・・そこまで・・・？」

土方が聞く。

「なんでかな？自分でもよく分かんないけど、元の兄貴に戻つて欲しいからかも。」

そんな、晋次の言葉を聞き神楽が下を向く。

「私も行くアル。神威を止めるアル。上、止めんのが下の役目ネ。」

新八も言つ。

「僕も行きます。神楽ちゃんたちを護るために行きます。」

銀時、桂、辰馬、柚鬼も顔を見合させたが答えた。

「ま、行くしかねえーよな。」

「その通りだ。」

「何とかするさ。」

「晋助、止めれんの俺らしかいねえーしな。」

真選組は呆れた顔をしたが、笑った。

「お前、うらしいな。」

「じゃあ、行きますか～。」

晋次が元気よく言った。

「待て、お前はここに留る。」

銀時が言った。

「えつ、なんで?」

「当たり前だろ。その怪我でどうするといふんだ。」

桂が言った。

「仕方ねえーな・・・。」

晋次は納得した。

「じゃあ、明日行くから。税金泥棒、晋次のことを頼むな。」

銀時が言った。

「押し付ける気かよ・・・まあ、頼まれてやる。」
「万事屋。お前ら今日は泊つてこけ。」

近藤が言った。

「いいのか?」

「ああ。」

そう言い万事屋一行はここに泊ることになったのだ。
全員が寝た後、晋次は布団から出た。
そのまま、屋根の上に行く。

(星が綺麗だな。そういうや・・・あととも屋根の上で兄貴たちと一緒に星を見たつけ。)

『兄貴。あの星何て叫つの?』

『じらねえーよ。』

『じゃあジラは知ってる?』

『知らないよ。そして、ジラじゃない、桂だ。』

『銀時は?』

『俺が知つたら奇跡に近づく。』

(あん時はまだ先生も居たよな・・・)

『あの星は北極星ですよ。年中位置が変わらないんですよ。』

『あっ、先生。』

『そろそろ、中に入りましょう。風邪引きますよ。』

『はーい。』

(もう、あの頃には戻れないのかな・・・。)

「 そんなところで何してるんでイ？」

声がした。

晋次は振り返る。

「 あっ、沖田・・・。痛つ。」

「 あんまり、無理しない方がいいですゼイ。」

そう言いつと晋次の隣にせりててきた。

「 何考えてたんですかイ？」

「 色々、昔のことをね・・・。」

寂しそうな笑顔で言った。

「 僕も旦那たちの昔を知りたいですゼイ。」

沖田が興味津津な顔で聞いてくる。

「 じゃあ、少しだけ話すかア。」

第十一訓 怪我をしたら無理をやめな（後書き）

どうでしたか？

次から過去編でいきます。

感想よろしくお願いします。

第十二訓　昔話（前書き）

第十二訓です。

少しずつ明らかになる4人の過去・・・。

第十二訓 昔話

「過去なんて言つちやあれだけど・・・俺らの昔話をするにあたつて忘れちゃいけない人が居る。俺たちの先生、吉田 松陽だ。」

その話を真剣に聞く沖田。

「俺らが先生に会つたのは・・・俺が2歳で、兄貴が4歳のときなんだ。」

『兄貴、寒いよ。』

『我慢できるか？雪もあと少しでやむからよ。』

一人の子供が雪の降る中を歩いている。
雪は段々強くなっている。

『本当にやむの？』

『大丈夫、大丈夫。』

弟と思われる子を懸命に慰める兄。

そんな、二人の前に現れたのは一人の大人だ。

『大丈夫ですか？』

自分たちよりかなり年上な大人を見て一人は不安そうな顔をする。

『震えることはないんですよ。なんで、子供のあなたがたがこんな雪の中を歩いているんですか？』

優しい声に兄の方が口を開いた。

『俺たち・・・お母さんが死んで・・・行く場所が亡くなつて・・・
それで、それで・・・
家を飛び出して・・・雪の中を歩いていたんだ。』

兄は泣きながら言った。

『私のところへ来ませんか?』

大人は優しい声で言った。

『いいの?』

子供たちは不安そうな顔で言った。

『はい。私は吉田 松陽と言います。あなた方は?』

『俺、高杉 晋助。歳は4で誕生日は8月10日だ。』

兄が先に言った。

『僕、高杉 晋次。2歳。10月8日生まれ。』

弟は不安が和らいだらしく笑顔で言った。

『じゃあ一人ともおいでなさい。』

松陽はそう言い、歩いて行つた。

二人もその後に続く。

松陽の家に着くと一人の少年が待っていた。

『先生、お帰りなさい。』

自分たちより年上と思われる少年が笑顔で言った。
少年は女顔で、真っ黒な髪が綺麗だった。

『小太郎、家族が増えましたよ。挨拶してくださいね。』

先生の声に小太郎はその後ろに居る子供に自分の名前を言った。

『俺、桂 小太郎。歳は5歳だ。』

そして、ニコッと笑う。

『俺、高杉 晋助。歳は4だ。』

『僕、高杉 晋次。歳は2。』

一人の姿を見て、小太郎は言った。

『紫の髪かあ。綺麗だね。』

そう言う小太郎の姿を笑顔で見る一人の子供。

その後はすぐ打ち解け、仲良く遊んでいる。

そして、それから1カ月。

松陽が一人の子供を連れてきた。

『先生、おかえり。』

晋次と晋助、小太郎が笑顔で言った。

『また、家族が増えましたよ。』

3人は先生の後ろに居る子に目を向ける。
その子は銀髪で赤い眼をした子だつた。

『俺、桂 小太郎。』

『俺、高杉 晋助。』

『僕、高杉 晋次。』

3人は自分の名前を言った。

『俺・・・坂田 銀時・・・。』

銀時は不安そうな声で言った。

『銀時の眼、僕と一緒に。』

晋次は笑顔で言った。

『じゃあ、お風呂に入ろうか。』

松陽はそう言い、お風呂の準備をしに行つた。

『銀時、怯えることはないんだよ。』

小太郎が優しく言った。

それを見た銀時はぱーっと笑顔になつた。

『ヤバー。かわいい！！』

小太郎のテンションはどんどんおかしくなっていく。

『ヅラ 小太郎。』

銀時が呟いた。

・・・・・。

『ヅラじゃない、桂だ。』

それを見た晋次と晋助はお腹を押さえて笑った。

『ヅラだつて、ヅラ。』

『お前、髪長かつたけどヅラだつたんだな。』

晋次と晋助が言ひ。

『ヅラじゃない、地毛だぞ。』

小太郎が言った。

『ヅラ、ヅラ、ヅラ、ヅラ。』

晋次と晋助は笑いが止まらなくなつている。

『晋次、晋助。いい加減にしよつよ。』

そんなことがあり4人はすぐ仲良くなつた。

「まあ、そんなことがあつたんだよ。」

晋次が呟いた。

「小さい頃は高杉もかわいいですねイ。」

晋次が寂しそうな笑顔で言ひ。

「兄貴は弟バカだから・・・。」

「晋次はだから、戻つて欲しいんかい？」

「昔は嫌だつたけど、今は懐かしいよ。そういうのって亡くなつてから重大さに気付くんだよね。」

沖田はそのことよく知つてゐる。
ミツバが居なくなつたら・・・なんとも言えない悲しさが残つて
いるから。

「俺も分かりますぜイ。」

その言葉を聞き晋次は笑顔になつた。

「そう言えば・・・あの副長いじめたら楽しそうだよな。」

「おつ、分かつてゐるぢやないですかイ。」

沖田も笑顔で言つた。

「じゃあ、俺ももつ寝ますよ。」

沖田はせつ言い屋根から飛び降りた。

その後ろ姿を見ながら、晋次は別のことを考えた。

（俺らはあの時に戻れるのだろうか・・・。先生が居たころに。辰馬や柚兎と会った時に。）

「先生、俺はどうしたらいいんかな？」

その様子を柱の陰で見ていた土方がやつてきた。

「なんか、悩んでいいよ’うだな。」

「土方・・・。」

土方は聞いてきた。

「お前らの先生は今は居ないんだろ・・・。それが、お前らが攘夷に参加した理由か？」

それに、驚いた顔を見せた。

「良く分かりましたね・・・。そのことは・・・いつか話しますよ。」

そつと晋次は屋根から降り、屯所の方へ入って行つた。

第十二訓 昔話（後書き）

どうでしたか？

次回は・・・とうとうターミナルへ・・・。

そして、戦いが勃発！？

感想よろしくお願いします。

第十四訓 祭り好きと運動会好き

「じゃ、行つてくる。」

次の朝、銀時たちはターミナルへ行く。

「万事屋、氣をつけろよ。」

近藤が言った。

「分かつてゐるって。晋次のこと頼んだよ。」

銀時はそう言つと、桂、辰馬、新八、神楽、柚鬼を引きつれて行った。

「あつそつじや。陸奥のこと頼んだぜよ。」

辰馬は振り返つてそつと言つた。

そして、後を追う。

「土方さん、昨日の夜の話し聞いていましたよねイ？」

沖田が言った。

「なんで分かつた。」「なんとなくですぜイ。」

沖田が言った。

その後、三人は屯所に入つて行つた。

「晋次。見送んなくて良かつたのか？」

土方が言った。

「別にいいんですよ。あいつらは絶対、兄貴を止めますから・・・。
」

晋次は一口一口しながら言った。

その様子を隣で無表情で見る陸奥。
ただ、どこか心配そうな顔をしている。

「陸奥は辰馬のこと心配？」

晋次が聞く。

「そんなことないぜよ。坂本は負けることはないさ。」

陸奥は確信を持つように言った。

その一人の様子を見て、真選組は部屋を後にした。

「陸奥どうする？」

晋次が聞く。

「行くぜよ。やつぱり近くに居たこそ。」

陸奥はそう言った。

晋次はすぐさまいつも着もの着替える。

「じゅあ行くよ。」

一人は布団の下に隠した靴をはき、窓から飛び降りた。
そして、ターミナルの方向へ走る。

「あり。ちよつと待つて」

晋次は急にそう語りて、方向を変えた。

「どうしてか？」

晋次は神社に入りて行き、草むらから一つの刀を取り出した。

「それは、なにがかかる？」

陸奥が聞く

一攘夷戦争の時に使つてた刀。紅椿つて言うアランジものだよ。

晋次は「コニコしながら言つて、帯に刀をさした。
そして一人はターミナルの方向へ走る。

そのターミナルでは・・・。

「ヅラ、辰馬、柚兎、新八、神楽行くぞ。」

「おー！」

6人はターミナルへ入つて行つた。

そして、階段を使い屋上へ向けて走る。

2階からは、鬼兵隊やら春雨の下つ端がやってきて戦闘状態に。

「クッソ。うちが明かねえ。」

銀時が言つ。

そして、2階、3階、4階、5階、6階、を過ぎ、7階へ。

「待つてたよ。」

そこに居たのは二口一笑顔の神威だ。

「銀ちゃん、先に行くアル。」

神楽が言つた。

「おい、神楽。お前一人を残せねえーつて。」

銀時が言つた。

「じゃあ、俺も残るから先に行つてよ銀時。」

柚兎が笑顔で言つた。

「わ、分かつた。すぐに追いついてこいや・・・。」

銀時たちは上の階へ走る。

「俺、アンタと戦いたかったんだよね。」

神威が言つた。

「俺もだよ。」

柚兎も笑顔で言つ。

「兄貴をぶつ倒すアル。」

戦闘が始まった。

その上の階では・・・。

「よお、アンちゃん達。」

阿伏兎が居た。

「銀さん。こいつは僕がやります。」

新八は決意のこもった眼で言つた。

「新八。死ぬんじゃねえーよ。」

「はい！..」

銀時たち3人は上へと上がつて行く。

その上では・・・。

「ここの先は通さないっス。」

「お前たちのロックを聞かせるでござれ。」

「フニーストパワーです。」

「

また子、河上、武市の3人が。

「わしは、その姉ちゃんをやるさ。」

「俺はそのロリコン男。」

「俺あ河上だな。」

戦闘がどこかの階でも始まつた。
そして、屋上では・・・。

「ククク・・・。どんな祭りが見れんのか楽しみだよ。なあ元志。」

高杉が冷たい声で言つた。

「そりかなか。俺は祭りより運動会が好きだよお。」

元志が明るい声で言つた。

「やうひいつ意味じゃないですよ。元志くん。」

女の声。

のぶタスこと今井 信女。

そしてその横には・・・。

佐々木 異三郎。

「ククク・・・。わあーてどんな」とこなんだりおな。

第十四訓 祭り好と運動会好（後書き）

どうでしたか？

次回の観どいには・・・神威△神楽、柚兎かな？

感想よろしくお願いします。

第十五訓 無理じゃあねえやなこ（前書き）

第十五訓です。

どひんーーー。

第十五訓 無理しそぎは良くない

「ハア、ハア、ハア、ハア。つ、着いた。痛つ。」

晋次は大量に汗を流しながら言った。

「おい、晋次。無理するじゃなか。」

陸奥が心配そうな声で言った。

「大丈夫。傷が開いてきているだけだから・・・。」

だが、辛そうに顔をしかめている。

一方、真選組の屯所では・・・。

「晋次ら・・・抜け出しあがつた。」

そう言いつと真選組はターミナルへ走った。

ターミナル前。

「あつ！――」

真選組が到着。

「はあ～。お前らな・・・。」

土方が呆れ顔をしている。

だが、晋次の方を見て顔を曇らせる。

「晋次、大丈夫か？」

「大丈夫。ハア、ハア、ハア。」

手で腹を押さえながら言った。

晋次はそのまま中へ入つて行つた。

「おい、待て。」

土方たちが止めようとした時、上から男女の一人組が降りてきた。

「お、おまえらは・・・。」

土方たちが驚いた顔をする。

「また、あなたたちと戦えるとは奇遇ですね。」

佐々木が言った。

「人斬りの眼の男の子よ。さあ殺りましょう。」

信女も言った。

「まさか、見廻り組が手を結んでは・・・。」

近藤が口を開けた。

「近藤さん行つてくれ。／行つてくだせH。」

沖田と土方が同時にしゃべった。

「こいつらは俺らがやりますんでえ。」

「近藤さんは晋次を頼む。」

そして、二人は刀を抜いた。

その様子を遠くから見つめる陸奥。

近藤も中へ入つて行く。

「なんだ〜。その程度。」

7階では神威が笑顔で言つている。

ただ、頬も腹も斬れている。

「黙りなよ、ガキ。」

同じく笑顔な柚兎。

そして、柚兎が刀を握つた。
神威も構えた。

「トラアアアアアア！！」

「ホアタアアアアアアアア！！」

ドガーン。

柚兎が体制を崩した。

「隙あり！！」

神威が手を振つた。

(かわせない・・・。)

柚兎は目をつぶつた。

ドガーン。

「柚つちイイイイー！」

神楽が叫んだ。

(手じたえがない・・・。)

「ハア、ハア、ハア、ハア。柚兎・・・大丈夫か。」

柚兎が眼を開けると晋次が居た。

「おい、晋次何やつてんだ。」

柚兎がどなつた。

「大体、立つてんのもやつとな体のくせして・・・。」

「大丈夫だから・・・。大丈夫だよ。」

だが、誰が見てもそれはカラ元気にしか見えなかつた。

「お前なあ・・・。」

柚兎が呆れる風に言った。

「うーん、俺飽きちゃった。」

神威はそう言つと、去つて行つた。

「神威イイイイ。待つアル。」

神楽が追いかける。

「乗れ。」

「ふえ？」

晋次が間抜けな声を出した。

「背負つてやる。」

そう言つと柚兎は晋次を背中に乗せた。
そのまま、神楽の後を追つた。

そして、他の所でも・・・。
決着はついていた。

「銀時イ。」

「銀ちゃん。」

「銀さん。」

他の人も銀時のところへやつてきた。

銀時は柚兎を見て驚いた顔をしている。

「晋次……なんで来んの。」

全員が晋次を見る。

「俺だって、なんかやりたいんだ。」

晋次は決意のこもった眼で言つた。

「仕方ねえーな。行くぞ……。屋上へー!ー!ー!」

第十五訓 無理じゃよくなーい（後書き）

どうでしたか？

戦闘シーンが書きずらかったため飛ばしました。
でも次の話は入れます。

次回は・・・神威ＶＳ神楽、柚鬼

元志ＶＳ晋次

晋助ＶＳ銀時

第十六訓 最終決戦。（前書き）

第十六訓です。

戦闘シーンが苦手なため・・・。

残念な出来です・・・。

第十六訓 最終決戦。

「来たな・・・。」

高杉が呟く。

「高杉、決着をつけようぜ。」

銀時が言う。

その様子を心配そうに見る神楽と新八。

「神楽。お前は・・・神威と決着付けて来い。晋次もそこのガキと決着付ける。」

銀時が言った。

「銀ちゃん・・・。」

「ジラ、新八、辰馬、柚兎。お前らは戦ってる奴らのサポートだ。」

「おう。」

その4人が返事をした。

「さあーて、最終決戦だ。」

晋次も柚兎の背から降り、刀を抜いた。

「兄貴、行くアルヨ。」

「さあーて、決着をつけようぜ。人斬りさんよ。」

晋次の眼は真剣だった。

「分かつたあ。さあーて行くぞお。」

元志が地面を蹴った。

そして、刀振り下ろした。

ガキイイイイイイ。

「ぐつ・・・。」

「晋次さーん！ー！」

新八が叫んだ。

「大丈夫だ。」

晋次が言つた。

神楽VS神威も死闘となつていてる。

「ほあちやあああああーーー！」

ドゴーン。

「銀時イ。お前、腕落ちたな。」

「黙つとけや。」

ガキイイイイイイ。

「うわっ。」

晋次の声が響いた。

「ハア、ハア、ハア。ぐつ・・・。」

「晋次！」

桂たちが叫んだ。

「大丈夫。大丈夫・・・。」

晋次が言つた。

「テリヤアアアアアアアア！！」

晋次が走る。

元志も身構える。

ガキイイイイイイイ。

「次で終わりとしよーや。」

元志が言つた。

「ああ。」

晋次も短く返事をする。
どつちも刀を構えた。

そして、一斉に走り出した。

シャン。

ドタッ。

どっちも同時に倒れた。

「ハア、ハア、ハア、ハア。」

「まさか、相撲ちとはねえ。」

元志が呟いた。

「ハア、ハア、ハア。こっちが・・・驚きだよ。」

晋次も呟いた。

銀時たちの方では・・・。

「ハア、ハア、ハア。」

「ククク・・・。晋次があそこまで強くなってるなんてな・・・。」

高杉が呟いた。

銀時が言った。

「俺らもそろそろ終わらせよーぜ。」

「ああ・・・。」

二人は走り出した。

ガキイイイイイイイイ。

ズド。

高杉の刀がとんだ。

「晋助イ！！」

元志が叫んだ。

銀時は刀が構えた。
だが、刺さる刺さらないくらいで刀を止めた。

「俺つて甘いな・・・。」

「ククク・・・。甘いものばかり食べてるとかうだ。」

高杉はそう言って、懐から短刀を取り出した。
そして、鞘から抜いた。

「銀時！..！」

辰馬たちが叫んだ。

高杉は銀時に刺そつとする。

「兄貴やめろおーー！」

晋次が叫んだ。

そこで、刀が止まった

「俺も甘い男らしいな・・・。」

「元からだろうが・・・。」

「

銀時が呟いた。

「晋次に感謝するんだな・・・。」

高杉が小さな声で言った。

「プラコンはかわんねえーな、高杉。」

銀時は呟いた。

「黙れ、天パ。」

「黙れ、低杉。」

そんな一人を見て、桂と辰馬はニヤついた。
新八はどうしたらいいかつといつ反応をしていく。

「やっぱ、俺あ・・・先生の仇は無理らしいな・・・。」

高杉は空を見上げた。

曇天の空を・・・。

銀時も桂も黙つている。

神威も神楽も柚兎も手を止めている。

「そんなことないよーーー。」

第十六訓 最終決戦（後書き）

どうでしたか？

そろそろ終わりそうです・・・。

小説の題・・・全然なぞつてない・・・。

感想よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5184z/>

夜兎と人の血

2011年12月27日21時48分発行